



くまざさ



第 5 号
 発行 会
 鈞 路 湖 陵 同 窓 会
 発行 日
 昭和 57 年 3 月 2 日
 題 字
 組 村 真 平 同 窓 会 会 長
 印 刷 所
 鈞 路 綜 合 印 刷 KK

湖陵同窓会館

青写真できる

会館の青写真が出来たそうです
 が……

「五十四年に組村会長が就任し、五十五年の幹事会並びに総会に於いて、湖陵創立七十周年事業の一つとして同窓会館建設の意向を発表し承認されました。早速、会館建設小委員会を設け、道内他校の同窓会館等を見学し、骨子組立への準備を進めて来ました。この間、現湖陵高校校舎の新築問題、或いは会館建設予定地が道新より寄贈された土地から他の土地へ移転の可能性が生じたりし、二転三転し結局最初の予定地へ即ち現湖陵高校正門西側のところに決まりました。そこで同窓生の設計家毛綱氏に依頼し出来ましたのが写真で見られる様なユニークな建物です。」

会館の性質とでも言いましょうか内容は……

「同窓生のみが使用管理するの
 か、それとも在校生も共同使用するのか種々検討の結果、会館の管理を学校側に委託する型を採用する事になりますので在校生と共同使用

と言う事になりませ。当初食堂の設置或いはアスレチックルーム、さらにクラス会等が可能な和室など色々考えられたのですが建坪の

制約等があり又記念碑的の事業と言ふ事もありまして、三、四百名収容可能な講堂、学生の部室として使用出来る多目的な部屋、同窓会

「事務室、シャワー室、トイレ等です。敷地が三百坪で建坪は二百坪位となります。」

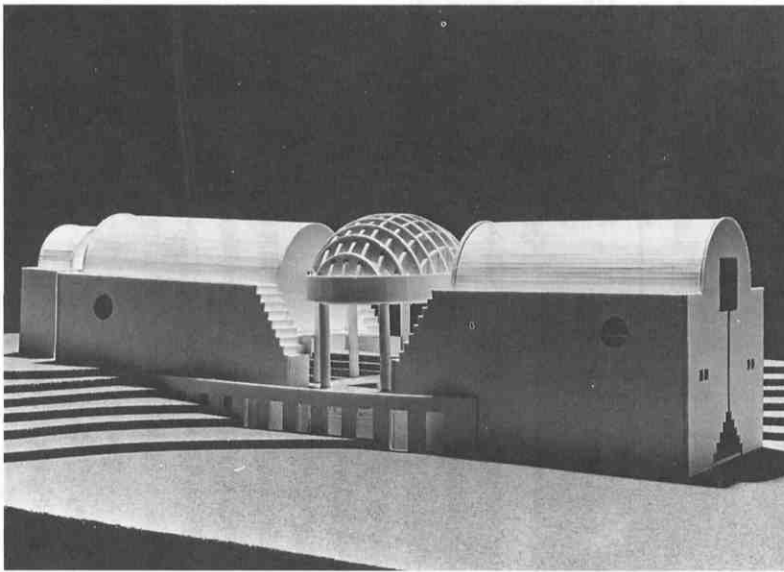
予算等は……

「木造ですと安くあがりますが、建物の性質、耐久性から鉄筋コンクリート造になると思います。調度品等を入れますと一億八千万位かと思ひます。鈞中、湖陵の卒業生一万参千人として単純計算しますと可成の負担額になります。同窓会館建設の件は米内会長時代からの悲願でもありましたし、道内の古参高校では既に会館又はそれに類似したものを持っているところが数あります。」

今後の予定としては……

「今年の総会で承認されましたら会館建設実行委員会を設け資金集めから始まります。整地から竣工まで半年以上かかりますので今年から稼働しなくては来年の七十周年に間に合いません。会館建設は湖陵創立七十周年記念事業のメインイベントですので、同窓会のみで行う事業ではなく後援会、PTAにも御協力を願う事になりますし又、その件に就きましてもトップ会議で承諾を得ております。」

※ おことわり
 この予定図は、まだ小委員会等において、正式な決定をみておりません。検討の素材であることをおことわりしておきます。



母校'81

ことしの活動をふりかえる

和田 信 幸



合唱

合唱部は、七月秋田市で開かれた全国高校総合文化祭に、全道の代表として総勢五〇名が初出場の夢を果しました。

紙面の都合で、今回はクラブ活動に限って母校の活躍ぶりの概要をご紹介しますが、延べにして実に四十一の部が全道・全国各地に本校の代表として遠征したことになり、一方では、こうした活躍を支える遠征費の捻出にも大変頭を痛めている一面もあります。今後とも会員皆さまのご支援をお願いしてご報告いたします。

殆どどの運動部が、共通して目標としているのが高体連と国体、今年は団体優勝のハンドボール(男子)、羽根球(男子)、体操(男女)、陸上(男子)、連続二十七回全道出場の剣道(男子)など一二部、国体では優勝のサッカー、前年度全道出場(選抜大会)のバレーボールをはじめ九部が各々地区予選を勝ち抜いて全道大会にコマを進めました。

また、選手権、選抜、新人戦など各種大会にも籠球、柔道、初出場の硬式テニスなど六部が地区の代表権を得ました。甲子園を目指す野球は、春の予選では江南に、夏の大会は北陽に各々決勝で惜敗し来年に長年の夢をつなぐこととなりました。

一方、文化系各部については、美術が学生全道展に三名入選、高校美術全道大会には六名入選、書道は中岡美緒さん(一年)が全道代表(宇都宮)に決定、全道読書感想文コンクールでは堀倫子さん(一年)も優秀賞を獲得、高文連理科大会では生物が総合賞、奨励賞、努力賞、化学が奨励賞、努力賞、放送局が全道発表大会に、アナウンス、放送番組制作の二部門で地区代表、器楽部が全日本吹奏楽コンクールで全道出場するなど、とかく運動部に比べ活躍の場が狭くなりがちで、目立たない文化系各部の地道な努力も見逃せません。

また、選手権、選抜、新人戦など各種大会にも籠球、柔道、初出場の硬式テニスなど六部が地区の代表権を得ました。甲子園を目指す野球は、春の予選では江南に、夏の大会は北陽に各々決勝で惜敗し来年に長年の夢をつなぐこととなりました。

また、選手権、選抜、新人戦など各種大会にも籠球、柔道、初出場の硬式テニスなど六部が地区の代表権を得ました。甲子園を目指す野球は、春の予選では江南に、夏の大会は北陽に各々決勝で惜敗し来年に長年の夢をつなぐこととなりました。

また、選手権、選抜、新人戦など各種大会にも籠球、柔道、初出場の硬式テニスなど六部が地区の代表権を得ました。甲子園を目指す野球は、春の予選では江南に、夏の大会は北陽に各々決勝で惜敗し来年に長年の夢をつなぐこととなりました。

一九八一年五月の生徒会発行部員名簿によりますと、体育系一六部四二〇名、文化系一七部、四局、二同好会五四二名、延べ九六二名(在籍生徒一三〇〇名の約七四%)、四人に三人が部活動に参加していることとなります。

こうした生徒の活動を支えられて送り出された多くの代表選手の活躍ぶりを紹介します。

その成果の一つとして、



ハンドボール

松原木材株式会社

代表取締役 **松原久幸**

釧路市材木町6番16号
電話 41-6370番

昭和20年立釧路中学校入学

釧路市議会議員
太平洋炭砒株釧路鉱業所

事務長代理 **日向郁雄**

第3回卒業

釧中33期 奥田達也

「校風刷新事件」

大正八年の正月二十七日、朝雪が白く染める釧路の町。釧中二期生、当時四年生の伊藤郷一ら二十一名は花輪盛の家に集まり、忠臣蔵の討ち入りよろしく勢揃いして登校した。世にいう「釧中校風刷新事件」である。

寄宿舎生の伊藤と向谷正吉は落合信男の父―釧路地方裁判所長―官舎に泊まりがけて陳情文を作り、檄文を郷一の叔父―のち道議会副議長―伊藤八郎の印刷所でこっそり印刷していた。

だが、日の釧路新聞は「釧中生悲憤の涙。学校の二大欠点を悲しむ。或は転校者も続出せむ」の見出しで六百字にも及ぶ詳細な内容の記事を報じている。更には、この日に配付の意気込みで刷新会が印刷した宣言文も、二十七日の釧新には載ってしまっていた。

伊藤ら刷新会のメンバーが登校したとき、すでに屋内体操場では阿部校長が、泣きながら全校生徒

に学校当局の実情を訴えていた。大正八年は第一次世界大戦の日本を含む連合国側の勝利色こく、国中が好景気の絶頂にあった。釧路町の人口三万七千。釧中も五十名募集を倍の百名に決めていた。だがこの時、教員数はわずかに十二名である。東北海道の開発

は進み、近郷の各町村も人口増加、教育思想も普及、好況は庶民に経済的な余裕を生み、釧中の競争率は三倍にもなっていた。それに加え道東だけでも帯広、野付牛、網走の中学校が新設される。教員は軍需産業の会社に引っぱりだこのありさまであった。

「清涼剤」と同情から郷一「ザンキ」と二度の碑文

こうしたご時世から刷新会の檄文―宣言文にいう、釧中生の風紀びんらん、教師不足となった。さて校長室で首謀者の伊藤、向谷に会った阿部校長は三回半にも

及ぶ陳情文と印刷された宣言を読み終えるや、激情も押えながら冷たく言った。

「いま、口頭で回答するか。それとも、文書をもって正式に回答すれというのかな」と。

釧中以来最高の成績で入学、その後もトップの伊藤は舎監も兼ねる校長には偉く世話になっている。ヒセンや脚気になったときも感謝をあらわせぬ面倒をみて貰った。厚岸出身の秀才、アイヌ巨尊の血を引く混血児向谷もまた貧乏ゆえ

に面倒を受けている。「この宣言文は二、三方所不穏当な字句がある。それを訂正するのなら、配布することは、君ら刷新会にまかせよう」と阿部校長。理路整然とした意見と訓戒であった。

校長の寝食を忘れての努力を生徒も世人も知っている事実の前に気負いこんだ伊藤らは一言の反論もできない。せめて、「よく分かりました。校長先生の苦衷を知らなかったわけではないのです。ただ、このままではいけない。世論を喚

起し、先生の一人でも多く来られるように願って、したことです。校風刷新のため、我々も努力します」と誓い、最敬礼して踵を返すのみであった。

十七歳の純真さ、幼稚さ、正義感も、こと社会に出てしまつては一人歩きする。宣言文はすでに外部に流れ新聞に載つた。町中はもちろん道内にも広まっていた。いまの校内暴力より以上にストは大変な暴挙の時代である。先輩の一期生が校長に、刷新会員に会う。父兄会が開かれる。「刷新会の歌」が生徒間に普及される。更にはこの事件により佐藤猪之助(後の野付牛中校長)ら二・三人の先生が応援にかけつたり、理科系教師が数名配置された。

それは戦勝の好景気で軽薄な気分を満たした当時の社会に一服の清涼剤として連日の紙面で大々的に報道され、世間の同情をかい、反響を呼んだためである。

「阿部先生の偉大さは徹底的な人間愛であった。自らに弓を引いた者に示されるこの偉大な愛こそ教育の根本義である。ザンキの一言につける」と胸像の碑文を二度も書いた伊藤郷一は後に語る。

有限会社カクヨ 小川商店

代表取締役 松田清明

釧路市弥生2丁目11番地
電話 42-0129番

第3回卒業

株式会社 村上紙茶店

取締役 村上史郎

釧路市大町2丁目2番地
電話 41-5055番

第3回卒業

今昔「湖陵」誌物語

(前編)

生きてゐる釧中魂

昭和五十六年度の生徒会機関誌「湖陵」第三十一号を眼前にして、機関誌の変遷について思いを駆せる。

「校友會誌」第壹號は大正七年三月に釧路中學校校友會によつて

発行されている。「校友會誌」の名前の機関誌は昭和九年発行の創立二十周年記念号が第十五號として

発行されていることは確認できるが、数年の欠落があつて、昭和十七年に釧路中學校報国団の手に

よつて「湖陵」第二十一號、翌一八年に二十二號が発行された後太平洋戦争の激化により休刊の止む

無きにいたり、二十二年に廳立釧路中學校校友會により「湖陵」第二十三號として復刊している。

創刊號に見る

釧中魂

一六ページより構成される創刊号は文芸誌的色彩の濃いもので、

病める身は

聖き月

清き光に浴びて

遙かに望みつ

病める身よ

吾子よ來たれ

聖き我が膝下に

笑める月は

与の星を遣はして

宣ひけり

よろ／＼と

あふなげなる

力なき

病める身は

庭に出て

聖き月の慰みに

白銀のその光浴びて

をろがみぬ額づきぬ

戦時色こい

二十一號

出征なされし諸先生へ

一C 淺野 賢治

諸生、元氣で活躍致してをりませうか。諸先生の御教へを受けて

だ我々は今傳統ある湖陵ヶ丘の學窓に學んで居ります

釧路の街にもいよ／＼冬がやつ

てまゐりました。野山は一面銀の

寶石を鏝めたやうになりました。

私は只今から釧路の街と學校の

近況を紙上でお知らせ致します。

朝の釧路は一面に霧がか、りは

うとして見えます。

働人はもう出てをります。嚴島

神社の展望台に上つて四方を見下

すと港には大きな汽船が赤燈台の

左方に横なへて見えます。

諸先生釧路の港を憶ひ出して下さい。

登校の生徒が白い息をはきなが

ら寒さうに通つて行きます。もう

登校の時間です九時です、校門を

くぐると元氣な釧中生の額が澤山

見えます。

舊校長阿部先生の功勞のある胸

像にも美しく鮮やかに雪がか、つ

て居ります。

學校では間もなく朝禮です。

週番が例の如く大きな聲を張上

げて皆の整列を促してをります。

組主任の先生は組の前に立つて

組の監視をしてをります。

大澤校長先生により朝禮をすま

しました。

今や國際情勢は明日をもしらぬ

様になりました。この難局に際し

我々第二の國民は固い決意を持つて進

坂上洋治事務所

所長 坂上洋治

釧路市材木町3番23号
電話 41-6079番

第3回卒業

渡辺進研グループ
東大ゼミナール花園教室

理事長 渡辺広志

釧路市花園町7番10号
電話 25-1305番

第3回卒業

るの意味を想って進みます。
どうか諸先生も釧中の名譽の爲に且大東亞建設の爲大いに活躍して下さい。

我々も釧中生たる名譽を重んじ諸先生の御教へをよく守り、元氣で勉強に運動に活躍致します。又校長先生以下九百名の湖陵健兒は諸先生の御健康を祈り武運の長久をお祈り致します。

戦後の「湖陵」誌に見る

機関誌に「湖陵」と名づけられた第一号は昭和二十四年に釧路高等学校校友会の手により発刊され、五十六年の第三十一号まで継続している。

第一号は日本經濟の復興が十分でない世相を反映して、紙は茶色の更紙であり、文章には戦後の日本を背負う若者の意気込みが強く感じられる。

寸感

松田 樹

明るく愉快な活氣にみちた學校生活、楽しく學ぶ事の出来る教室の雰囲気、お互が學校に来る事の

喜びを覚え、日の生活。

此の様な學校に勉學し、そして生活してみたいものである。過去一年の母校の歩み来りし跡を考へる時此の念の起らざるを得ないものがある。動くことを強要される迄もなく吾々は自ら起ち上がらなければならぬ。人のふり見てわがふり直す前にわがふり作つて人にみせなければならぬ。——勿論言う迄もなく責任であり義務である。そして主体性即ち自主性を確立し新しき分野を開拓しなければならぬ。

古き殻を脱して大勢を達觀せよ。そこにこそ新しき世界が展開するであらう。

自己の榮達目的の學問はもはや存せぬ。
市民としての一社會人としての修鍊を積まなければならない。そして觀念の工場化さんとする架空的生活意識を根底からくつがへさなければならぬ。

二十世紀の眞の哲學は正に我々より出發することを信念せよ。そして甘い享樂的浮草を除去せよ。シベリアの果てに幾十万人の人々が零下何十度の嚴寒に祖國の姿を喰ひえがきて歸る日をまちわびる現實を考へよ。

今やれい明る暁が太陽の光線にふくらむ地平線を色どつてゐる。諸君よ起て！進むのだ！

母校の祈りて筆を置く。

文才のない悲しさから上手に表現を表現できないうちにページも終わりに近づいてきた。

機関誌の編集は三号、四号は生徒会文芸部の手によってつくられ、現在のように生徒会によって編集されたのは五号以降のことである。「特集記事」が時代を反映するものと予想して調べてみると、經濟復興の著しい平和な日本を反映してか適當なものを見つけることはできなかった。

- 十八号 高校生活と生徒会
- 二十一号 湖陵生白書
- 二十九号 湖陵生は今
- 三十一号 生徒会は今

などが特色あるものとしてあげられるものである。若者が時代を鋭く見つめる特集を望むことは無理なのであろうか。

「湖陵」十八号にある詩を紹介しておわりとする。

前進

吉田 浩二

ギユツギユツ とじやりをふみ

一歩一歩 進んだ

遠くでかすかに

汽車の汽笛がなっている

俺の歩みだけが

未来を知っているかのように

暗黒の世界にむかつていった。

ギユツギユツと力強い音をたてて

はるか はるかかなたにある

幸福の森に向つて進んだ。

まぼろしが

俺の前にあらわれる

すでに旅立つた兄の姿が……………

その口からもれた

わずかなことは

「ゼ・ん・し・ん」

俺の心をかたくきしめた。

(文責 附屬中・岩本)

中 中 中

常盤商事株札幌支店釧路営業所

所長 佐々木 久

営業所 釧路市北大通8の2
道銀ビル3F
電話 (代)24-5171番
第4回卒業

酒・食料品 ⊖ 柴田商店

柴田 富也

釧路市弥生1の3の10
電話 41-8960
第4回卒業

わが青春に悔ありと云われても

張 江 悌 治 (湖五期)

今や受験シーズンにたけなわである。仲間と盃をくみかわしながら口に出るのは、「よく入学出来たなあ」「今ならまず駄目だ」である。いつのまにか我等熟年、仕事や家庭の重圧にたえながら、したり顔で過ぎし日を語り合う今日この頃である。我々が入学したのは昭和二十五年、名門湖陵にとって画期的変革ともいえる男女共学が実施された年である。もともと我々はずでに新制中学でトレーニングを積んでいたのに別に異和感はなかったが、バンカラ気質の上級生や武骨そのものといった先生方にと

生徒の姿を見て、急拠全校生徒を集め、「云々ゆるイチ対イチで」とあたかも不純交遊かの如く、まわりくどく注意をしたものだ、今ならまさにクレージーであろう。

ある日突然伝統の湖陵の旗がエビ茶に変わった。アカ旗は駄目だというのである。釧路の早慶戦とも云われた江南との野球試合で相手側のブルーの色にスマートさを感じながら、「真紅の旗はグテチャない」とヤケっぱちでエビ茶の旗をふりまわしたものである。その思い出多い校舎も我々の卒業を目前に昭和二十八年二月焼失してしまつた。受験の為に上京して

こで行われたのか、そして卒業証書もどうなったのか未だにわからずじまいである。わが青春に悔ありと書けといわれても、とうてい無理な話である。強いて云えば、夏は下駄、冬は長靴であった我々にとって一度でいいからジーンズにスニーカ

歩いてみたかった。して引受けたものの、狂女の顔と



校庭の片隅で語り合う一組の男女

わが青春に悔あり

釧中を卒業して既に五十年である。処々に鮮烈な記憶が残るが、その周囲は茫漠として定かではない。誰が？いつ？どうして？ということがはっきりして来ないのである。今「くまざき五号」に請われるままに、ともすれば、切れようとする記憶の糸の一本だけを、たぐり繋いで、わが青春の悔を曝すことにしよう。

雀百まで

中 江 孝

多分、創立記念日を中心とした行事の一環であったように思う。当時、国語の先生であった「矢田先生」の指導で、演劇を上演するこ

とになった。演じ物は、久米正雄原作の「地蔵経由来」である。それぞれ配役も決まり、

毎晩、寄宿舎に集まり練習に入つたのであるが、一人だけ狂女「おきぬ」の役が決らず、当時「お嬢さん」という渾名の私に、その役

が廻ってきたのである。男女共学ではなかったから、誰かが演らねばならぬ女形である。私は意を決して引受けたものの、狂女の顔と

演技を曝しての練習は、何としても誇りが許さず、マントをおぶつての練習であった。……そして五十年が過ぎ、我々釧中十六期生は、江の島に集まり懐旧談に花を



咲かせたのであるが、ずる賢い若者役であった「三品君(東京在住)」の曰く、中江君に逢つたら言いたいと思

が、本番ではカツラを

い女になって出てきたのにはびつくりしたよ。僕はその瞬間に台詞を忘れて、ひどい目にあつたよ。

それを言いたかつたのさ」と。

私はおとなしい若者であったが、

いいうなれば「目立ちたがりや族」というのであろうか、その後、京都薬専時代はお嬢様を演じ、終戦後の釧路にあつては、北方芸術座に属してドサ過りでラブシーンを演じたのである。私にとって青春の悔は、一生の悔となつて続いた

よる。

湖陵二七会 (湖四)

- 会長 遠藤 隆吉
- 副会長 妹尾 継男
- 滝沢 泰雄
- 山本 アケミ
- 幹事長 晃 昇 繁夫
- 副幹事長 小畑 竜英
- 幹事 上原 春生
- 青山 克彦
- 熊谷 修
- 清藤 昭三
- 斉藤 妙子
- 藤原 文夫
- 菅野 幸子
- 木戸 次夫
- 仲谷 一男
- 紫田 富也
- 五十嵐 松夫

事務局

釧路市富士見一六
労働事務センター内

T(〇一五四)
④一八六三六

同窓会だより

創中30・31期の巻

幹事長

松島良治

去る八月九日商工会館における親会の同窓会に参加して、久しぶりに先輩・後輩に出逢い、同期と語り毎回の如く、命洗われる午後の一刻であった。増えることのない先輩・同期の諸氏のなつかしい顔々。例年ならば地方からこのために出席した友達と夜、一席を

設けていたが、本年の⑨の期に続く我々⑩期は、来年の当番期に当たるため、本年はじっくり秘策を練るため、二週おいての八月二十三日夜、パシフィックにおいて同じ年に入学した30・31期の集會を催した。

発起人は30期の小野重和・成田竹治、31期は五A太田敏雄・沢野浩、五B坂野勤・唐川佳也、五C池ヶ谷栄一・松島良治である。司会進行役の上岡信明が開會宣言をし、続いて逝きて帰らぬ物故者の

冥福を祈るため黙禱を捧げる。続いて松島良治代表に久しぶりに逢ってなつかしい。来年は我々の当番期だ頑張ろうの決意を含んだ代表としての挨拶。続いてご招待した物理の小林・剣道の男沢両先生が昔を偲ぶ話を交代でなされた。

この一年思えば、去年ご案内してお元氣だった岩清水先生の姿はなく、月日の移りの早さと、人生の



無常を感じた一瞬であった。続いて遠来の客「くまざき」にも連続して在京同窓生のようにすを掲載し

てもらっている、創新東京支社長佐川和美同窓事務局長の在京者の活躍近況報告。続いて祝電披露。同期衆議院議員池端情一氏と東京で活躍する奈良忠君の分、そして唐川佳也幹事より欠席者からのハガキによる近況の発表報告があった。隣室に移り、一同での記念写真の撮影。来年も又元氣で会合しようの祈りをこめてフラッシュがたかれる。席へもどり、なつかしの校歌を力強く全員で合唱、今の三星霜の歌詞は当然五星霜と唱う。三十五年ぶり出席の中標津高野哲夫氏の涙ながらの音頭で、開宴。

四つの大テーブルにはクラブアールパンからの十五名のホステスがつき、お互いに席を頻繁に移動しての邂逅懇談である。途中成田竹治幹事からは、クラブは休日ながら今夜は開店して低価で諸君をお待ちしているので、帰路は割勘で立寄ってほしいとの代弁演説もあり終始なごやかな雰囲気であった。終末に至り小野重和幹事より、来年の当番期のこともあり我が会の代表者を松島氏にと提案あり、全員一致で、当番期の我が期の代表を松島に決定せり。松島氏より本日の進行者を含め十四人の委員幹事の口頭委嘱があり、全員快諾にて来

年のスタートを切った次第。夜も更けて、台風余波の窓うつ風の音をききながら、辻徳夫氏の応援団三三七拍子で氣勢をあげ、次いで池ヶ谷幹事による湖陵応援歌第一、二、十を高らかに大合唱をし、秋霧あがりネオンが巷にまたたく九時、これまた三十五年ぶり子科練に志し、元氣で帰国再度入学した茶内の本間国秀氏による来年度まで互いに元氣でと祈念して、万才三唱。閉会の辞を宣し、一年ぶりの同期会の邂逅を了え、それぞれ繁華街へと散り、おひらきとなったのである。(上岡記)

記念館で講演会

鱈淵市長、我が青春を語る。

同窓会主催、在校生対象の講演会が十一月二日正午から湖陵記念館で行われた。前年から始まったこの企画は学校、在校生に好評であり、今回は鱈淵市長鱈淵俊之氏(湖陵七期)が「我が青春を語る」と題し、会場を埋めた四五〇名を前に約一時間熱弁をふるった。

病魔にむしばまれた絶望的の青春と、それを克服して活路を開いた想い出話は、困難にくじけず努力することの尊さをさす体験的の教訓で一同に多大の感銘を与えた。



タイプ印刷から高級オフセット印刷まで

釧路総合印刷株式会社

釧路市白金町19-2

TEL (代)23-9201

昭和五十六年度

湖陵同窓会

総会おわる

昭和五十六年八月九日(日)、湖陵同窓会総会並びに懇親会が、釧路商工会館を会場に、五四〇名の会員を集めて盛會裡に行われた。

総会は、若々しく力強い組村会長の挨拶、母校中村校長の祝辞、(母校のようす、校舎改築計画について等)のあと議事にはいつて遠藤幹事長より事業報告、見田会計長より決算報告、山本会計監査より監査報告があつて、それぞれ承認された。

つづいて役員改選にはいつたが、教職員湖陵会の会長、人事の關係で、田村副会長が名倉副会長と交代したことの外、会員留任と決まった。(役員名簿は末尾に記載)

最後に久本副会長より同窓会館の建設についての報告があつて総会を終えた。つづいて、杉山公氏の怪妙な司会で、和やかに懇親会が

スタートした。

はじめに、多くの努力と卓抜したアイデアを発揮して、今回の行事を企画遂行してくれた当番幹事(釧中二十九期、湖陵九期、湖陵十九期)のメンバーを、その労をねぎらいながら、五十嵐副幹事長より、紹介があつた。

アルコールが体内にいきわたる頃になると、会場のあちらこちら



で、同期のサークルが広がり、談笑となつかしさが満ちあふれていた。母校応援団、ブラスバンドの演奏、市長の飛び入り歌曲、同窓のプロ歌手が錦上添花をそえた。

役員名簿

顧問	丹葉 節郎(釧8)	幹事長	遠藤 隆吉(湖4)
顧問	米内富久司(釧12)	会計長	見田 吉郎(湖12)
顧問	古谷 武一(釧13)	会計監査	矢野 幹夫(湖3)
顧問	坂下 忠勝(釧16)	顧問	守谷 生弘(湖6)
顧問	米沢悟空翁(釧17)	顧問	山本 寿福(湖8)

望まれる

母校の早期改築

第四号でお話した新校舎の一つのモデル(五百分の一模型)はすでに校長室に置いてあります。さて本校改築時期の予想ですが、道の十ヶ年計画の中の改築計画に

よりますと、前期(五十一—五十五年)の実績は目標、二十三校完成に対して、実績、三十二校完成済み。後期(五十六—六〇年度)では、目標、四十八校完成に

対して、現在、三十二校着工中で、残り十六校を、どう選んで五十九・六十年度に改築するかが問題です。

五十校余り残っているという木造率の高い学校から選ぶとして、本校が入るかどうか。老朽狭隘の本校が、木造率だけの理由で後に

残されることは大きな問題です。本校は火災後の応急建築に加え

小刻みな増改築による欠陥の多い校舎です。中心校などと言われながら、校舎面積は基準の五十五%

程度しかありません。そろそろ早期改築に向けて本腰を入れなければならぬと考えております。

(中村)

計 報



永年にわたって、当会の役員のとめてこられた岡野政広さんがなくなつた。二月十四日午前八時四十五分。まだ五十七才。

当会への功績はつとに有名だが湖陵バスケット部OB会の会長としても、十数年の永きにわたって後輩の面倒をみた。

温厚でユーモアのある人柄は、同期はもとより、先輩や後輩からも慕われていた。合掌。

あとがき

いくつか寄せられた記事、紙幅の關係で次号に。御容赦の程を。

三月十日(休)

母校卒業式。四三四名の湖陵魂よ。大きくはばだけ。

本年度をもって同窓生数は一万六千三百六十一名となる。

(藤)